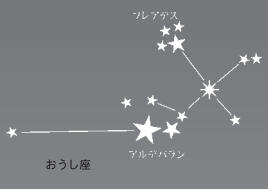

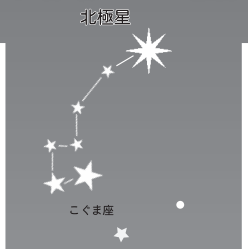

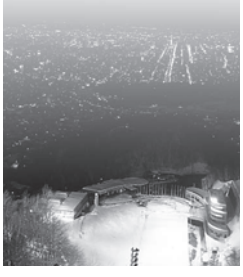

ヒグマの生態と野生動物との共存

夕張市医師会 会長　中條（ちゅうじょう）　俊博（としひろ）

故郷「夕張」は、かつて石炭のマチとして隆盛を誇ったが、昔も今も静かな山々や清流に囲まれ、穏やかで豊かな自然に包まれている。市内には紅葉山、鹿の谷、熊の沢などの地名があるが、それぞれに炭鉱の風情や記憶があり、かつ谷や沢、そして動物と「ヒト」との関わりが地名に深く刻まれている。そんなマチの風景の中で、野生動物は常に身近な存在であり、「ヒグマ」は夕張岳をはじめとする山々に棲む森の王者である。彼らの足跡や爪痕を見つければ、やはり恐怖を感じるが、大自然の厳しさと神秘を肌で感じることができるであろう。

2025年、夏の厳しい暑さが秋まで続き、秋の落葉が進む前に降雪に見舞われるなど、北海道の四季は目まぐるしく変わっている。このような中、鳥獣の個体数増加やヒトの生活習慣の変化などを背景に、どんぐりやコクワ等の実が育たず、餌を求めて「ヒグマ」が「ヒト」の暮らす生活圏に出没し、「ヒト」や農作物に危害を加える事故が相次いでいる。このため、法改正により緊急銃猟制度が創設され、特定の条件が満たされた場合には市町村長の判断の下、銃器を使用した捕獲等が可能になり、さらに事態が深刻化している地域に対して自衛隊が派遣され、後方支援を行っているほか、北海道でも「ヒグマ警報」や「ヒグマ注意報」の発出により、不要不急の外出を控えるよう呼び掛けている。

炭鉱（やま）の閉山とともに、「ヒト」は去り、静けさを取り戻しているが、我が故郷でも「ヒグマ」が例年よりも多く出没しているため、市民に不安や動揺が広がっている。山菜採りや登山の際に、「ヒグマ」対策として「熊鈴」や「熊スプレー」が欠かせないが、残念ながら、その普及率や利用率は低いと言われている。「ヒト」にとって「ヒグマ」は危険鳥獣であるが、同じ地域のなかで暮らす隣人でもある。これ以上、被害が拡大しないよう、私たちは「ヒグマ」の習性や生態に関する学びを深め、廃棄物処分に関するルール化や鳥獣の侵入防止のための電気柵の増設など、さらなる努力や工夫が求められている。大自然に囲まれ、「ヒト」と「ヒグマ」の距離が近い地域だからこそ、今後も安心してマチで暮らし続けられるよう、国や道の抜本的な対策に期待したい。

空港防災管理

宗谷医師会 会長　伊坂（いさか）　雅行（まさゆき）

令和２年１月に当医師会元会長 故横田愼一先生の名誉市民を祝う会が開かれた。

来賓として、当時の北海道医師会長 長瀬清先生が出席されていたが、祝宴が終わった際に長瀬先生から「伊坂先生、空港の防災管理をお願いできないか？」と言われた。

正直、何で私に？という気持ちで伺っていたが、長瀬先生の心中は分からないままだ。何処かでお逢いした際に伺ってみたいと思っている。

その頃は稚内を含む道内主要７空港がターミナル民営化運営を開始した頃で、早速空港職員と打ち合わせを重ね、防災管理への取り組みが始まった。初めに、医療物資の検討に取り組んだ。稚内空港が所持している医療物資を全て拝見し、定期的に更新作業が必要な物や新規に購入することが望ましい物などを検討し、助言をしてきた。

その後、空港側で稚内空港緊急時対応計画検討委員会を立ち上げ、自衛隊や警察、消防を始め自治体、バスやタクシーなどの交通機関も含め、多くの関係機関が委員会に参画した。

被害想定としては航空機事故だけでなく、地震や津波などの自然災害も含め空港での災害発生時の対応を関係機関と協議してきた。

ここ数年で総合訓練を開催できるまでに至り、先日も航空機事故対処総合訓練を行っており、地域災害拠点病院である市立稚内病院のDMAT主導による訓練を実施した。

いつ発生するか分からない事故や災害に対して、体制準備が整ったことになるが、まだまだ課題も多く、訓練を繰り返し行い反省点を改善していく必要があると感じている。

訓練ではDMATが主導で動いていただいているが、実際に災害が発生した際に、DMATへの出動要請に至るのには時間を要する。その際は、近隣の医療機関から医療従事者が事故現場に向かい初動対応をせねばならない。常日頃から、そういう意識付けを持ち合わせておく必要があると思っている。